「時間が時間だから」構文の意味と使用

東京大学大学院　氏家啓吾

1. はじめに

本発表で扱うのは、同じ名詞（句）が二度生起した「XがXだ」という形式を持つ次のような種類のコピュラ文である。多くの場合、主節ではなく理由節や条件節に現れる。以下これを「時間が時間だから」構文と呼ぶ。

(1)　a. 時間が時間だから、電話するのはやめておこう。
　　b. 太郎は年が年だから、新しいことを覚えられない。

これらは同語反復の形式で、「時間がどうなのか」「年がどうなのか」を明示的に述べてはいないけれども、ほとんどの話者が (1a) は時間が遅いこと、(1b) は年齢が高いことを表していると理解するであろう。どのような知識がこの表現の適切な使用と理解を可能にしているのであろうか。

このような小規模な表現パターンを的確に把握するには、「語彙」と「文法」の二分法ではうまくいかない。各語彙項目の意味と一般的な文法規則さえわかれば自動的にこの表現の意味や使い方が導き出されるとは思えない。むしろ、「XがXだ（から）」という具体的なパターンそのものが有意味な記憶の項目として、話者によって利用されていると考えられる。使用基盤モデル（usage-based model）は、「語彙」「文法」の二分法を根本から見直す提案であり、実際の使用に密着した具体的なレベルの知識を捉えることができる考え方である。本発表では、この見方に立つことで、「時間が時間だから」構文のもつ様々な側面を包括的に理解することができることを示したい。

発表の構成は以下のようになっている。まず、2節で構文という用語と構文の分析の指針として採用する使用基盤モデルについて説明する。3節では、この構文についての先行研究の成果を紹介し、残された問題を明確化する。4節ではXの位置に現れる名詞について観察し、5節では本発表の分析を提示する。6節は全体のまとめである。

2. 使用基盤モデルにおける構文

以下では、構文の概念と、使用基盤モデルを説明する。まず、最も広い意味での構文（construction）は、言語使用者によって習得された形式[1]と意味との対と定義される。この定義では「歯ブラシ」のような具体的な語も含まれ、語彙・文法の連続体の全体が構文によって構成されていることになる。このうち、構成要素の一部が抽象化されたパターンとなっているものがある。例えば、「[名詞句1]　を　[名詞句2]　に、…」という表現（例：「地図をたよりに、…」「あの日を境に、…」）や、「[名詞]＋目当て」という表現（例：「財産目当て」「小

[1] ここでの形式とは、音声や身体動作などの、記号の知覚可能な側面のことである。

遣い目当て」）がそうである。こちらを構文スキーマ（constructional schema）と呼ぶ。この発表では以下、構文スキーマと同じ意味で構文という用語を使う。「時間が時間だから」のような「XがXだ」表現は、この意味での構文（＝構文スキーマ）であると想定できる。

使用基盤モデルは、Ronald Langackerの提唱する認知文法（Cognitive Grammar）の根幹をなす、人間の言語の知識がどのようなものかについての見方である（Langacker 2000, 2008）。以下では3つの点に絞って説明する。

A. すべては使用から

まず、語や構文などといった言語知識の単位はすべて実際の言語使用の経験（「使用事象」と呼ばれる）から、各言語使用者によって抽出され記憶されると考える。個々の使用事象は、特定の状況・文脈の中で特定の伝達意図を持ってなされた特定の音声の知覚を含んだ経験であるという意味で、きわめて具体的なものである。その一部の側面が、繰り返し経験されることを通して、ボトムアップな形で心内に知識として蓄えられることになる。

B. 具体-抽象のネットワーク

語や構文を始めとする言語の知識は、細部を含んだ具体的なレベルの知識から、文法規則のような抽象的なレベルの知識までが、互いに関連づけられた大規模なネットワークとして共存していると考える。例えば、「悔しさをバネに」のような具体的な語が指定された表現単位と、より抽象化された「[X] を [Y] に」のような最上位の構文スキーマは、前者が後者の一例であるという関係で結ばれつつ、共存している。

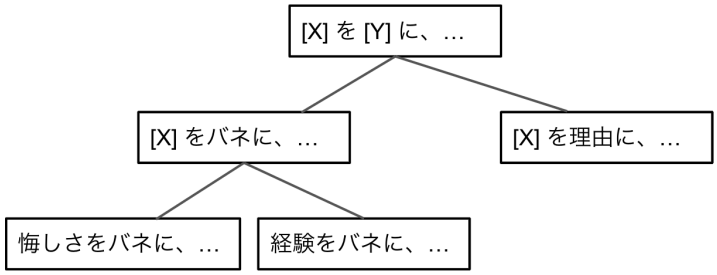

図1 具体的な知識と抽象的な知識がネットワークの中で共存する

そして、具体的な単位の方が抽象的な上位スキーマよりも使用場面において利用されやすいという意味で、知識の中で重要性をもつ。そのため例えば「[X] を [Y] に」構文を記述するときにはこのようなネットワーク全体を記述することが重要になる。

C. あらゆる側面が意味の一部になりうる

使用事象は様々な細部を含んでおり、そこから言語知識が抽出されるため、使用事象のどのような側面であっても、繰り返し経験されることを通して言語知識の一部になる可能性がある。ある語が繰り返し同種の状況・文脈の中で使われることを経験すれば、その特性も語の意味の一部となる。例えば「むかしむかし」という表現が使われるとその直後に特定の種類の話が語られるという知識は、この語彙項目の意味の一部になっていると考えることができる

（Langacker 2008: 457–463）。また、次のような「～をつかまえて、…」という構文にも、発話の状況が織り込まれている。

(2)　こんな紳士をつかまえて、なんてことを言うんだ。

この例のように捕まえる行為が生じていないのに「～をつかまえて」が使われる慣習的構文においては、「不当な評価に対する不満を表明する」という発話状況がこの構文の意味の一部となっていると分析できる（氏家 2019）。

以上のように、使用基盤モデルは言語の知識を言語の使用と密着したものとして捉える立場である。この指針にしたがって構文の分析を行なっていく。

3. 「時間が時間だから」構文の先行研究と問題

本発表で「時間が時間だから」構文と呼ぶ「XがXだ」という形のコピュラ文については、先行研究によっていくつかの重要な特徴が明らかになっている。主要な研究として森山（1989）、Okamoto（1993）、久保（1992）、グループ・ジャマシイ（1998）、坂原（2002）がある。以下ではそれを紹介したうえで、残された問題を明確化する。

3.1. 従属節に現れる傾向

この構文が理由節や条件節などの従属節で多く使われることは、森山（1989）をはじめとしてほとんどの先行研究で意識されている。

(3)　【理由節】
　a. 時間が時間だから、電話するのはやめておこう。　(=1a)
　b. 太郎は年が年だから、新しいことを覚えられない。　(=1b)

(4)　【条件節】
　a. 採点者が採点者なら、この答案は零点だ。　（久保 1992：51）
　b. 時代が時代なら、逮捕されてたかもしれないよ。　（作例）

また、Okamoto（1993）は以下の例をあげて主節で使われにくいことを示している（漢字かな表記に変更）。

(5)　# 最近勉強してないから、成績が成績だ。

しかしながら、独立の文として言い切りの形で使われることもある。

(6)　a. 時間が時間だ。もう帰った方がいい。
　b. 金額が金額だ。すぐには決められない。　（久保 1992：52）

3.2. 評価

「時間が時間だから」と言えば時間が遅いこと、「年が年だから」と言えば年齢が高いことを表すとほとんどの場合解釈される。一般に、「XがXだ」はXについての望ましくない内容を表すことが指摘されている。たとえば「お天気がお天気だから、ピクニックはやめようよ」というのは自然だが、「ピクニックに行こうよ」と続くのは不自然に感じられる。Okamoto（1993: 451）はこの性質について、「この構文を使うことにより話し手は（Xの指示対象の持つ）性質を、関与する人にとって望ましくない、あるいは脅威となるものとして提示している」とまとめている。

一方、グループ・ジャマシイ（1998）は、「XがXだから」についてはマイナス評価を表すとしながらも、「XがXだけに」はマイナスの含みを持たないとしている。次の例では、素材が良いこと、場所が良いことが述べられていると解釈できる。

(7) ここの料理は、素材が素材だけに味も格別だ。

(8) この店は味は大したことはないが、場所が場所だけにたいていいつも満員だ。

（グループ・ジャマシイ1998: 67）

筆者の観察では、確かに「XがXだ」は望ましくない評価を表す例に偏っているものの、中立的な例も多い。また、条件節の場合はマイナス評価が関わっていないように思われる。

(9) メンツがメンツなので（マモと小林ゆう）記事の内容もなかなかにぎやかでおもろいですオススメ。（現代日本語書き言葉均衡コーパスから）

(10) 時代が時代なら覇権取ってもおかしくないくらいには面白かった神ゲーなんよな

（Twitterから）

3.3. コピュラ文の意味構造

コピュラ文の分類との関連で、久保（1992）は「時間が時間だから」構文の「XがXだ」が坂原（1990）の「同定文」の一種であると述べている。坂原の分類では、コピュラ文「AはBだ」が記述文（主語の指示対象がある属性を有することを表すもの）と同定文（主語の表す役割への値の割り当てを表すもの）に区別される（西山 2003 の用語との対応も記しておく）。

(11) 【記述文】（西山 2003 の措定文）

a. 紫式部は平安時代の作家だ。

【同定文】（西山 2003 の倒置指定文）

b. 源氏物語の作者は紫式部だ。

（坂原 1990：33–34）

同定文については次のように説明されている。

同定文「AはBだ」は値の同定を求める疑問文「Aはだれか」（人間の場合）や「Aはなにか」（物の場合）などへの返答とみなせる。この「なにか」や「だれか」は「どの人か」や「どれか」の意味であり、属性同定の「どういう人か」や「どういう物か」ではない。（坂原 1990：34）

久保（1992）によれば、「XがXだ」はこの意味での同定文の意味構造を持つということである。次の例を見比べるとわかりやすい。

(12) a. 彼の年齢は55歳だ。
b. 彼は、年齢が年齢だから、なかなか職が見つからないようだ。

（12a）が同定文であり「年齢」と「55歳」の間に役割と値の関係が成り立っているのと同様に、（12b）の「年齢が年齢だ」においても、前の「年齢」が役割を表し、後ろの「年齢」がその値を割り当てているという関係があるということである。坂原（2002）も同様に分析している。

久保はまた、「時間が時間だから」構文においては主語Xに「誰の」「いつの」に当たるような隠れた変域要素が付属していると述べる。「時間が時間だから」の主語の「時間」とは今の時間、あるいは話題の時点の時間であり、(12) の主語「年齢」も彼の年齢のことである。

3.4. 問題

以上のように、この構文の記述はなされているが、いくつかの問題が残されている。第一に、Xにどのような名詞が使われるかという問題は先行研究では取り組まれていないが、構文の知識を包括的に記述するうえでは欠かせないと思われる。

第二に、理由節や条件節などの従属節で使われることが多いことを見たが、従属節にも様々な種類がある。その中でも特にこの二種と結びつくのはどうしてだろうか。また、独立の文として使われる場合もあるという事実はどのように説明したらよいだろうか。

最後に、どうして「XがXだ」という同語反復の形式が使われるのか。Okamoto（1993）は、Xの持つ「望ましくない・脅威となる」性質が「話し手が明示的に述べるのをためらわせ」、同じ名詞が反復されるのは「それに明示的に言及するのを避けるため」だと説明している（Okamoto 1993: 451）。しかし、条件節の例では評価の制限がないことや理由節でも評価的に中立的な例が多く見られることを考慮すると、この説明には限界がある。では、なぜ同語反復なのだろうか。この構文を使って話し手は何をしているのだろうか。

4. 名詞の特性とコピュラ文

4.1 生起する名詞

「XがXだ（から）」に使われる名詞Xに注目しよう。まず指摘しておくべき点は、この構文がパターンとして定着しているイディオム的な表現であるとは言っても、Xの位置に様々な名詞を使って聞いたことのない新規の事例を作ることが可能だという点である。つまり、この構文はXに関して生産的な構文である。「研究テーマが研究テーマなだけに」のように新規な例を作ることができる。（これはもちろん「時間が時間だから」「時代が時代なら」のような高頻度の事例表現がまるごと記憶されていることを否定するものではない。）

しかしながら、どんな名詞でも使えるというわけではない。例えば固有名詞は使われにくい。また、「キリン」などの動物種を表すような名詞[2]や、「男性」のような一般的な類を表す名詞も使われにくい。

(13) ?? タモリがタモリだから……
(14) ?? キリンがキリンだから……
(15) ?? 男性が男性だから……

この構文のXの位置に現れる語はどのような意味的なまとまりをなしているのだろうか。

現代日本語書き言葉均衡コーパスを検索しXに現れる名詞を調べたところ、以下のような結果が得られた[3]。以下この節であげる例文は断りのない限りこの調査によって得られたものである。

表1 「XがXだ」のXに生起する名詞とその頻度（107件中）

名詞	頻度	名詞	頻度
時間	11	時期	4
事情	10	事	3
場所	9	立場	3
年	7	場合	3
内容	4	時刻	2
相手	4	時	2
状況	4	季節	2
時代	4	サイズ	2

[2] 久保（1992: 50）では「クジラがクジラだから、まずくてもしょうがない」という作例が、（クジラの下位分類のひとつとしてナガスクジラがあるという前提があれば）「クジラがナガスクジラだから…」という解釈で適格な例として挙げられているが、筆者の感覚では少し不自然に感じられる。とはいえ、後述する通り類を表す名詞であっても自然になる例が存在するため、久保の議論が成り立たなくなるわけではない（4.2参照）。

[3] 検索システム中納言を用い、短単位検索で「［名詞1］が［名詞2］だ」を検索した（「だ」を語彙素として指定しているため「で」「な」など他の活用形の例も含まれる）。ヒットした例のうち［名詞1］と［名詞2］が同一の文字列である例（301件）を抜き出し、さらにその中で「気が気でない」「自分が自分でなくなる」などの非該当例を除いて残った例（107件）を考察対象とした。なお「世が世なら」という表現が17件観察されたが、これは重要な知識の単位であるが、固定した表現であるため、生産的な構文の性格を知る手がかりとして不適当と判断し考察から除外した。また検索の都合上、コピュラが省略された例や、ガ以外の助詞が使われている例（「時間も時間だ」など）は今回の結果には含まれていない。

まず、全体として状況設定を表す名詞、特に時間的な設定を表す名詞が目立って多い。

(16) 【時間設定】時間、時代、時期、時刻、時、季節、時勢
a. 時間が時間だから、今日はもうまっすぐ家に帰ってもらった方がよさそうだな。
b. 「あたし、補導られたことないもんね」　そう威張るということは、やはりそれなりにヤンキーだったのかと行衡は思った。時代が時代なので、それも不思議ではないが。

(17) 【状況設定】場所、状況、場合、天気
a. 場所が場所だけに、車で来る人が多いので、結構すぐに無くなります。
b. むろん、状況が状況だけに、いささか脅えておられるのはご容赦願わなければなりませんが…

また、人や物事の側面を表すと言えるような名詞も多い。

(18) 【人の側面】年、年齢、立場、服装
a. 年が年ですから、もの忘れがひどくて、途中で抜けるんですね。
b. わたしは深夜まで道路をさまよって、たえず歩きつづけた。服装が服装なので浮浪者として警官に逮捕されるのではないかというのも不安だったが、（…）

(19) 【物・事の側面】事情、内容、色、性質、テーマ、値段、サイズ
a. 相談はしたいのだが、内容が内容だ。
b. 値段が値段だけに、きっと期待も大きいでしょうから。

その他、「相手」も多く見られる。「ヒント」が使われた例もあった。

(20) 「もうアセっちゃったよ―ひと晩一緒にすごしたら、フツウ、どうにかなってるって思うじゃない？　しかも相手が相手だしさ―けど、あのふたり、やっぱり姉弟みたいなんだよ。あたし、今までよけいな心配してたみたい」

(21) 「サンタが街にやってくる」という有名な曲は多くの人がカバーしていますが、以前ＦＭラジオで聞いた海外の少年が歌ったバージョンが今も忘れられません。ヒントがヒントなんで難しいとは思いますが、知っておられる方は是非教えていただきたく思います。

4.2. フレームの観点から

ここに見られる名詞のまとまりを捉えるためには、フレームという概念を使うことが有効である。たとえば「人質」という名詞の意味を理解するには、その背景にある、次のような複雑な状況の知識を持っていなければならない。これは狭い意味での言語的知識ではなく、一般的な（百科事典的）知識の一部である。

(22) ある人（A）が別の人（B）に何らかの要求を受け入れさせる上で自分に有利な状況を作るために、Bにとって大切な人（C）を自分の支配下に置き、要求を受け入れなければCが危険にさらされるとBに示唆する。

このような、言語表現の理解に必要とされる構造を持った知識のまとまりをフレームという（cf. Fillmore 1982, Barsalou 1992）。この中の各要素をフレーム要素という。各フレーム要素はフレーム全体および他の要素と関係づけられており、そこから切り離して理解することはできないという点が重要である。《脅迫による取引》フレームにはおおむね以下の要素が含まれているだろう。

《脅迫による取引》
・脅迫する人A
・被害者B
・Bの大切な人C
・AのBへの要求内容

「人質」という名詞は上記のフレームを背景として喚起し、その中のCにあたる要素を表すわけである。そして実際に脅迫による取引が行われる状況においては「脅迫する人：太郎」、「被害者：次郎」というようにそれぞれのフレーム要素に対応する値が存在することになる。

「時間が時間だから」構文のXに現れる「時間」「天気」「値段」「年齢」「相手」などの名詞は一般に、なんらかのフレームの一要素を表す名詞であると考えられる。例えば「相手」は会話のフレームや試合のフレームにおける一つの要素を表す名詞である。「値段」は商品のフレームの一要素を表す。

《会話》
・相手
・内容
・時間
・……

《商品》
・値段
・品質
・商品名
・…

「時間」や「場所」は、多数の出来事のフレームに含まれる一般性の高いフレーム要素である。上記の固有名詞や、「キリン」「男性」などの類を表す名詞は、フレームの要素を表すと捉えられにくいためにこの構文に生起すると不自然になる。類を表す名詞でも、フレームの一要素として捉えられるならば自然な例になる。例えば、「犬」が単なる動物種としてではなく各家庭の一つの構成要素であると捉えられている場合、凶暴な犬を室内で飼っている家を話題にして次のように言えるだろう。

(23) あの家に上がるときには気をつけたほうがいいよ。犬が犬だからね。

以上の内容を、この構文が同定文の意味を有するという分析（久保 1992, 坂原 2002）と組み合わせると、コピュラ文「値段が値段だ」は次のように分析できる。まず、名詞「値段」は《商品》フレームの一要素を表す。そしてコピュラ文「値段が値段だ」は、（《商品》の一例である）話題になっている特定の商品に関して、「値段」の表す要素の値はなにかという問いを背景とし、その答えの値を割り当てる文である（ただし答えの値は明示されない）。

5. 分析

5.1. 節の形式

次に、節関係の問題に移る。前節と同じコーパス調査で「XがXだ」が用いられた節の形式に着目すると、次のような結果が得られた。

表2 節関係の分類と頻度

分類	接続形式の例	頻度
理由	から(34)　ので(28)　だけに(13)　し(7) 等	87
言い切り	だ。(7)　だ、(2)　だった。(2)　である。(2)	13
条件	なら(1)　だと(1)　でなかったら(1)	3
疑問	のか(2)	2
連用中止	であり(1)	1
逆接	だが(1)	1
合計		107

条件節の例は3件と少なかった。ただし、今回除外した「世が世なら」を含めるとはるかに多くなる（注3を参照）。条件節の例をあげる。

(24) 「我はあんなサンピンではない。狐は狐でもアマツキツネ、天狗の方じゃ。場所が場所なら大天狗だぞ」

逆に、主節に言い切りの形で現れる例は少なくない。しかしながら文脈を見ると、形式上は言い切りであっても、どの例も文脈の中でなにかの理由として機能していた。

(25) 飛び出した<u>いきさつがいきさつだ</u>。気づいたときに、すぐに一言連絡を入れたほうがよかったかもしれないが…、電話しづらいのも事実だ。

(26) 声を低め、「あのときは、<u>事情が事情だった</u>。子どもの傷ついた姿を見りゃ、誰だって腹が立つ。少々やり過ぎだったが、引き金を引いたわけじゃない。

(27) 「ねえ、すぐ遊びにこないか？」［略］ふだんの日だったら、良いも悪いもなかった。すぐオッケーするところだったが、状況が状況だ。「うん、悪くない話だけど…」

(28) 子供の日、幸運の四葉のクローバーを夢中になって探したことを思い出す。ある、ある、たくさん！ 場所によっては数十本ゴソッと。おお、幸せがここに、とばかりすべて摘み取り、かつてのように押し葉にしてみる。しかし、数が数だ。二十本くらいでギブアップしてしまう。

これら4つの例において「XがXだ」の表す内容はそれぞれ、電話しづらい理由、「少々やり過ぎ」な行為をした理由、誘いを断る理由、ギブアップする理由として働いていることが読み取れる。このことから、理由節や条件節という節の形式の問題ではなく、意味の問題、すなわち理由であることや条件であることが重要だとわかる。

5.2. 聞き手の知識の想定

以上を踏まえて、この構文を使う話し手は何をしているのか、言い換えれば、これは何をする構文なのかという問題に取り組む。先述した通り、Okamoto（1993）は「XがXだ」について、(i) Xの持つ望ましくない・脅威となる性質が話し手が明示をためらわせ、 (ii) この構文で同じ名詞が反復されるのはその性質に明示的に言及するのを避けるためだと説明している。このうち (i) は完全には成り立たないとしても、明示を避ける機能を持つ反復であるという (ii) の考えは正しいように思われる。つまり、この「XがXだ」において、主語Xは（「Xはなにか」という問いを表す名詞句として）意味的貢献を果たしているのに対して、コピュラ補語Xは、補語の位置にありながらも、空白を埋めるために用いられているのみで、意味的貢献を果たしていない。

これは、「ネズミを取らなくても、ネコはネコだ」のような典型的なトートロジーの文において述語が意味的貢献を果たしている（つまり、何かがネコだと述べている[4]）のとは対照的である。この意味で、「時間が時間だから」構文を消極的な同語反復と特徴づける事ができるだろう。消極的な同語反復とみなせる類例として、次のような慣習的言い回しもある。

(29) a. もしかしたら、もしかするよ。
b. ひょっとしたら、ひょっとするんじゃないか。

ただし、明示しない理由はマイナス評価のみには求められない。ここでは、聞き手の知識に関する想定と関連づけたい。すなわち、「XがXだ」が使われる時、Xの担う問いの答えがどうであるのかが、聞き手がすでに知っていると想定されること（語用論的前提）として扱われているのである。Xの繰り返しは、聞き手がすでに答えを知っていることを暗に示す。たとえば「年齢が年齢だから」において話し手は「年齢は？」という問いを提示しつつも、同じ名詞「年

[4] フランス語のトートロジー文を論じた藤田（1988）においては、この種の文の二つ目の名詞句Xは、等質的なものとして捉えられたカテゴリーXを表すと分析されている。これは積極的貢献を果たしているということを意味する（坂原 2002 も参照）。

齢」で埋めて無内容化することで、「あとは、ほら、言わなくてもわかるよね」と暗に示している。つまり、「年齢がアレだから」のような暗示的な表現に近い意味を持つ。

そのため「XがXだ」は、この部分によって聞き手の知識を更新するためには用いられない。それを示す事実として、「Xだ」の部分が焦点となるような疑問文の答えとして使うことができないことが挙げられる。

(30) A「太郎の年齢は？」
B a.「かなり高齢だよ。」
b. 「#年齢が年齢だよ。」

(31) A「このTシャツ高い？」
B a.「高いよ。」
b.「#値段が値段だよ。」

では、「XがXだ」の表す内容が聞き手の知識を更新しないとすると、それは発話の伝達内容にどのように貢献するのだろうか。そこで理由・条件との関わりが重要になる。

5.3. 帰結関係

この構文が発話に有意味な貢献を果たすのは、「XがXだ」の表す内容が、上位の話題への帰結をもたらすことによる。例えば、次の発話においては、「天気が天気だ」の表す下位の話題の内容が、ピクニックに行くかどうかという上位の話題へと帰結をもたらす。

(32) 天気が天気だから、ピクニックはやめよう。

(33) 【上位話題】ピクニックに行くか？
帰結をもたらす↑
【下位話題】天気は？

つまり、天気がよければ行く可能性が高く、天気が悪ければ行かない可能性が高いという帰結関係が背後に想定されている[5]。この構文の意味の一部として、こうした上位の話題への帰結関係が組み込まれていると考えることができる。

「XがXだ」の内容そのもの（下位話題への答え）は聞き手に新しい情報をもたらさない。しかし、上位話題への帰結をもたらす限りで伝達内容に貢献しうる。別の言い方をすれば、この節の表す内容そのものは既知でも、帰結関係が既知であるとは限らない。そのため、帰結関係を問う疑問文への答えにはなることができる。

(34) 「太郎はどうして物を覚えられないの？」「年が年だからだと思う。」

(35) 「どうしてピクニックはやめたの？」「天気が天気だったからだよ。」

[5] この考え方は江口（2002）の「AはB次第だ」の分析を参考にした。

理由と条件のいずれかとして働くのは、両者が帰結関係を含んでいるからだと説明できる。「XがXだ」の内容が事実であれば理由となり、想定にとどまっていれば条件となる。また、帰結を持つことが重要であるために、文脈上理由として働いてさえいれば節の形式は理由節でなくてもよいのである。

そして帰結関係は、4節で見た名詞Xの背後にあるフレームによって支えられている。フレームの要素は他との関係の中で理解され、その知識の一部には、要素同士がどのような因果関係で結ばれているかという知識も含まれる（Barsalou 1992: 35）。例えば、上であげた「値段」に結びついた《商品》フレームには、値段が高くなればその分品質も高くなる傾向があるといった相関関係が含まれているだろう。このような背景知識が、「XがXだ」の内容から上位話題への帰結関係を成り立たせている。

同定文は通常「AはBだ」の形をとるが、この構文は「XがXだ」の形をとるという事実も、上位の話題に対して下位に位置付けられているからだと考えられる。これはOkamoto（1993: 460）の、主語Xが「注意の中心ではない」ためにハではなくガ使われるのだとする指摘とも一致している。

6. まとめ

以上、使用基盤モデルの指針に沿って「時間が時間だから」構文について分析してきた。主張は以下のようにまとめられる。まず、「XがXだ」の名詞Xはフレームの一要素を表す名詞であり、主語として「Xはなにか」という役割を表している。一方述語のXは意味的貢献を果たしておらず、コピュラ文「XがXだ」の表す内容は使用において聞き手に既知と想定されている。その内容は、文脈において上位の話題に帰結をもたらすことで発話の伝達内容に寄与する。このように、「XがXだ」という形式が直接的に表す内容だけでなく、話し手の想定する聞き手の知識状態や、文脈の中で帰結を持つことを含めた使用に根差した詳細な知識が、この構文の意味に組み込まれていると考えることができる。

参考文献

Barsalou, Lawrence W. (1992) Frames, concepts, and conceptual fields. In: Adrninne Lehrer & Eva F. Kittay (eds.), *Frames, fields, and contrasts: New essays in semantic and lexical organization*, 21–74, Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates.

江口正 (2002) 「「AはB次第だ」の解釈について—値の間の相関関係—」『福岡大学日本語日本文学』12: 71–82.

Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In: Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111–138, Seoul: Hanshin.

藤田知子 (1988) 「Une femme est une femme – X ÊTRE X 構文解釈の試み」『フランス語学研究』22: 15–34.

グループ・ジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』東京: くろしお出版.

久保智之 (1992) 「日本語の同語反復コプラ文に関する覚え書き—「時間は時間だ」と「時間が時間だ」—」『福岡教育大学国語科研究論集』33: 44–56.

Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.) *Usage-based models of language*, 1–63. Stanford: CSLI Publications.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.

森山卓郎 (1989) 「自同表現をめぐって」『待兼山論叢 日本学篇』23: 1–13.

西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』東京: ひつじ書房.

Okamoto, Shigeko (1993) Nominal repetitive constructions in Japanese: The 'tautology' controversy revisited. *Journal of Pragmatics*, 20 (5), 433–466.

坂原茂 (1990) 「役割、ガ、ハ、ウナギ文」日本認知科学会 (編)『認知科学の発展』3: 29–66.

坂原茂 (2002) 「トートロジとカテゴリ化のダイナミズム」大堀壽夫 (編) 『認知言語学II カテゴリー化』105–134, 東京: 東京大学出版会.

氏家啓吾 (2019) 「「つかまえて」構文の意味と動機づけ」『日本語文法』19 (2): 101–116.